

# 人間性

「こうしてついに、銀のひもは切れ、金の器は打ち砕かれ、水がめは泉のかたわらで砕かれ、滑車が井戸のそばでこわされる。ちりはもとあった地に帰り、霊はこれを下さった神に帰る。」(伝道者の書 12:6-7)

神が造られたあらゆる被造物の中で人間はこれまでで最高で最も複雑なものである。けれども人間はその高ぶりから神が自分たちの創造者であり、自分たちが造られたものであって神に依存するものであることをしばしば忘れてきた。この記事は人間とは何かについて聖書が言っていることを調べるものである。

## 神のかたちに造られた

(1) 聖書は、人間は神の特別な決定によって神のかたちに神に似るものとして創造されたと言っている(創1:26-27)。それはアダムとエバは進化(単純な細胞から複雑で知的な人間の状態にいのちが徐々に発達したとする説)の産物ではないということである(創1:27, マタ19:4, マコ10:6, →「天地創造」の項 p.29)。神に似るものとして創造されたので人間は神に応答し、神と個人的に交わることができた(創1:26)。また神の特性である愛、栄光(威光、美、創造性)、聖さ(道徳的靈的純粋性、健全さ、悪からの分離、これらは人間が神のみこころに逆らったときに破壊されたもの →創1:26注, →「神の属性」の項 p.1016)を表すことができた。

(2) 人間の中にある神のかたちの少なくとも三つの面を見ると(→創1:26注)、アダムとエバはもともと正しく聖いものとして造られ、神に(道徳的に)類似したものを持っていた。それは神と正しい関係を持ち、良い目的に献身し、悪から離れていたということである(⇒エペ4:24)。また正しいことだけを愛し、望むことのできる心を持っていた。そして霊と知性と情熱と選択力を持つものとして創造されたので知性の中に神に類似したものを持っていた(創2:19-20, 3:6-7)。肉体的構造もある意味では動物とは違って神のかたちに似せて造られた。神が旧約聖書で目に見えるかたちで現れるとき(創18:1-2)、また御子が地上に来られるときにとる姿を(ルカ1:35, ピリ2:7)、神は人間に与えておられた。

(3) アダムとエバが神の命令を退けて罪が侵入したとき、ふたりの中にあった神のかたちはひどく傷ついた。けれども完全に破壊されはしなかった。

(a) ふたりが神に逆らったときに道徳的類似性は損なわれ(⇒創6:5)、もはや完全な聖いものではなくなった。そして罪に陥る(神に逆らって自分勝手な道を行く)傾向を持つものになった。この罪の性質は子どもたちに受継がれた(⇒創4: , →ロマ5:12注)。新約聖書は人間の中の神のかたちは罪によって腐敗し(汚れ、傷つき、損なわれた)、曲げられたと言っている。そして最初の道徳的な神の姿を回復するには靈的な救いが必要だとはっきり示している(⇒エペ4:22-24, コロ3:10)。

(b) 同時に、罪びとである人間は神との類似性の多くをなおも持っていて、知性や神との関係や交わりを持つ能力を持っている(⇒創3:8-19, 使17:27-28)。アダムとエバがエデンの園で罪を犯したとき、私たちの中にある神のかたちも傷ついたけれども、完全に除かれたのではなかった(⇒創9:6, ヤコ3:9)。

## 人間である要素

神のかたちに人間を創造するに当たって、神は三位一体(三面性を持つ)の存在になるように企画された。つまり人間はみな霊、たましい、からだから成り立っている(1テサ5:23, ヘブ4:12)。

(1) 神はアダムを地のちりから造り(肉体)、その鼻にいのちの息(霊)を吹き込まれたので人間は「生きもの」(たましい)になった(創2:7)。神は人間がいのちの木から食べ、善悪を知る知識の木から食べてはならないという命令に従うことによって、完全に造られた状態で生き続けることを願われた(⇒創2:16-17, 3:

22-24)。人間が罪を犯した結果、死が世界に入ってきたあと、初めてからだが地のちりに帰り、霊が神に帰ることになったと聖書は言っている(創3:19, 35:18, 伝12:7, 黙6:9, →「死」の項 p.850)。肉体が霊とたましいから分離するのは(肉体の死の時点で)、罪を犯した人類に対する神ののろいの結果である。この状態は現在のところ変えられないけれども、「終わりの日」に肉体が復活するときに初めて変ることになる(ヨハ6:40, →「肉体の復活」の項 p.2151)。

(2) しばしば「いのち」と訳される「たましい」(《ヘ》ネフェシュ、《ギ》ブシュケー)ということばは簡単に言えば、肉体と霊の結合によって人間の中でできる非物質的部分である。ここには知、情、意が含まれている。霊とともにたましいはひとりひとりが肉体的に死んだときも生き続ける。その意味で聖書は「たましい」と「霊」という二つのことばを同じように使っている。たましいは内面の人間性に密接に結び付いているので、時には「人格」と同義語(同じ意味を持つことば)として使用される(レビ4:2, 7:20, ヨシ20:3)。「からだ」(《ヘ》バサー、《ギ》ソーマ)は簡単に言えば死んだときに土に帰る肉体的、物質的部分である。これは「肉」と呼ばれることもある。「霊」(《ヘ》ルーアハ、《ギ》ブニューマ)は人間の非肉体的(物質的)部分(神が与えられたその人の本質)で、霊的能力、可能性、良心が含まれると言うことができる。私たちが神の御霊と最も直接に接触できる部分である。

(3) 人間「全体」を構成する三つの要素の中で霊とたましいだけは破壊されることがなく、天国か(黙6:9, 20:4)、地獄で(⇒詩16:10, マタ16:26)、死後も生き残る。けれども生きている限り悪と不道德な影響や行動を避けて、からだを大切にするように聖書は強く求めている(ロマ6:6, 12-13, 1コリ6:13-20, 1テサ4:3-4)。私たちのからは神の奉仕にささげなければならない(ロマ6:13, 12:1, →「性徳の基準」の項 p.2379)。からだも復活するとき(いのちに生かされ、たましいと霊とが再び一つになる)に変貌し、完全な変化を体験する。救いを受け、イエス・キリストにいのちを明け渡した人々は復活を通して最後に完全な人間性を回復する。

## 人間であることの責任

人間を創造されたとき神は人間にいくつかの責任を委託された。

(1) 神がご自分のかたちに似せて人間を造られたのは、永遠に人間と愛のある個人的関係を築くためだった。人間には神を主(自分の生涯の導き手、権威)として認め、あがめる能力が与えられた。神は人間が神との正しい立派な関係を楽しむことを願われたので、サタンがアダムとエバを誘惑して神に逆らわせることに成功したときに、この世界を贖う(救い、救出、回復、解放、買い戻す)ために救い主を送ることを約束された(→創3:15注, →「天地創造」の項 p.29)。

(2) 人間が何にもまさって神を愛し、自分を愛するようにほかの人々を愛することが神の目的だった。完全で無欲の愛についてのこの二重の命令は、神の律法の全体を要約している(レビ19:18, 申6:4-5, マタ22:37-40, ロマ13:9-10)。

(3) 神は結婚という制度を設けられた(創2:21-24)。神は結婚が一夫一婦制(一人の異性との誠実な関係)で、夫と妻との一生にわたる関係になることを願われた(⇒マタ19:5-9, エペ5:22-23)。そして結婚という枠の中で神は人間に「生めよ。ふえよ」(創1:28, 9:7)と命じられた。夫と妻は家族という状況の中で性的関係を持ち、神を敬う子どもたちを生むのである。神は家族と子どもたちを健康な家族関係の中で愛をもって教え導くことをこの世界で何よりも優先するべきものとされた(→創1:28注)。

(4) 神はアダムとその子孫に地とほかの生きものに対する権威を与えられた(創1:28)。まだエデンの園にいるときにアダムには園を管理し、動物たちに名前をつける責任が与えられていた(創2:15, 19-20)。

(5) アダムとエバが神の命令に逆らって禁断の木の実を食べたとき、この世界に対する権威の多くを失い、「この世の神」(Ⅱコリ4:4)であるサタンに渡してしまった。サタンは今この時代をかなり支配している(→Ⅰヨハ5:19注, ⇒ガラ1:4, エペ6:12, →「神の摂理」の項 p.110)。けれども神はなおも、神に従う人々が神の指示を守ってこの世界をよく管理し、大切に育てているものを神にささげ、神に喜ばれる方法で神の被造物を管理するように期待しておられる(⇒詩8:6-8, ヘブ2:7-8)。

